

四月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

猪口一杯

影山 一 男 千葉

都落ちして四十年浦安の老いに粹などもう似合はない

ガン患者生存率の小数点以下の数値の一人ぞわれは

手術後をコロナ禍の中過ごせし日飲むに苦しみ食に苦しむ

寛解と告げられ迎へし新しき年に口にす猪口一杯を

末吉のみくじをひきて帰るさのぬくき日ざしよ良き年となれ

私有地

木 畑 紀 子 京都

書き終へし賀状百まい祈りこめて投函にゆく冬至の小径

年賀状じまひといふ語とびかひてぶつぷつぱちぱちの音す

うしなひしものはわすれむ歳月は恩寵にしてわれを老いしむ

妻になり母になり祖母になりしこと凡にして拙 あかまんま咲く

かたはらに短歌のあるは心処に小さき私有地あるごとき幸

夢洲

鈴木 竹 志 愛知

一日十数万人が集ひるし万博会場の今が気になる

木造の大屋根リングも片されて一部は保存あとはどうなる

使はれしリングの木材ガザの地に運ぶ復興プランはなきや

解体はあらかた終はり人気無き夢の洲はや鳥獣の園

夢洲とふ名付けの真意を邪推する万博はただ一炊の夢

baby pay

水 上 芙 季 神奈川

発熱の夜は職場の夢を見て林さんが挨拶に来てゐた

連絡が取れなくなつて胡桃菓子もらひしことや手の記憶など

自分用（おもちゃの）スマホを手に入れて着信音を響かせる吾子

プラスチックでできたスマホをよく見ると「baby pay」といふアイコンがある

実家へ行く前夜「こ、こ」と使ひたり友からもらひし高級バッグ

☆

☆



森 重 香代子 山口

茶簞箒も開かぬままにいつよりか来客のなき家となりゆく
上体を絶えず揺りつもの思ひしてゐしわれよ日差し移れり
ガラス窓の半分ほどが冬の空その下に暗く杜は鎮もる
生きのびて独居の日々を送るなど思ひみざりき若かりし日に
窓近く一本立ちに寒椿花咲かせをり年あらたまる

水 島 晴 子 兵 庫

桑 原 正 紀 東 京

月のぼり思ひ出づるよやはらかき肉持つわれがむかしゐたこと
チンパンジー(アイ)が死にしと育ちたる(霊長研)も改称せしと
洗ひ干す枕カバーにのこりたる白髪を爪むいつぽんにほん
昭和百年去らんとしつつ翼灯の赤きをかざし飛行機とべり
形見とて『字統』手渡し七十は死ぬによろしき年齢よと言ひき

高 野 公 彦 千 葉

狩 野 一 男 東 京

狛犬を照らす温とき冬ひざし浴みて日本の平穩を謝す
「馬鈴薯を食べる人々」の寂しき絵見つ越前の蟹を味はふ
外出せず疲労なき日も夕餉には酒樂しめり老人失格

幼児なりき青年なりき夫なりき寡夫となり今は老いた生命者
目覚めても鏡を見ても夜深くトイレに來ても我のゐる不思議

奥 村 晃 作 * 東 京

宮 里 信 輝 神 奈 川

アブナイ歌キワドイ歌を平然と採るなり斎藤齋藤氏選歌
イノシシが猛進するがにすんなりと時に採るなり今井氏選歌
精と根尽くし果てたるイトヒバの連作に挑む谷川由里子さん
定型と関わりなしに精魂を尽くしし歌採る加藤治郎さん
沢山の言葉賜いき『天啓』の Zoomin にお越しの横山未来子さん

二〇二六年明けぬ初詣今年もいつもの八菅神社へ
駐車場へクルマ駐めれば今年はも「クマに注意」の立て札が立つ
もしクマと出会ったときは騒がずにまなこ逸らさずゆつくり退歩
おさい銭紙へいを入れて手を合はせお願ひしたり「家族の健康」
参拝後八菅山頂の展望台へ来て一望す「関東全景」

小島 ゆかり 東京

クリスマス・イブ前日の街を行けりころはとほいとところから来て
身長がすこし縮んでビルの間まのそら滝壺のやうにあやふし
むきだしのいのちとおもふ晴れわたる新年のたかき鳥居くぐれば
六十年わかき孫なりみだれふるゆきをばくばく喰らはんとする
世界図の罅めりめりと拡がれり二〇二六年一月三日

島田 暉 神奈川

年末に花火つぎつぎ打ちあがり靈魂らしき火の花裂くる
地上から花火つぎつぎ打ちあがり裂けてかがやく異界の喝采
転びても起きては歩む一步二歩花ばな咲かせ鳥鳴く空へ
夢にみし無数の足のがんばりて黄泉よみの平坂下るあの世へ
落葉せし落葉樹林の枝の間に傷口深き冬の青空

大松 達 知* 東京

中国の古い映画の中でだけ見た高粱ゴウリヤウのその酒を飲む
タイトルを忘れ女優の名を忘れそれでも見える高粱畑
孜孜として両耳はありはつなつの寺院のごとく光を受けて
そうなのか、edgeなのか、くらげとは時間が迷子しているかたち
えつちらと鞆を寄せておつちらと取り出しており何かの未遂

田宮 朋子 新潟

螺旋めく時の流れに堰ひとつあるかのやうな大年の夜
知る知らぬ祖父父母四人のだれよりも長生きをして雑煮を食べる
おくるみのなかに眠るはわれの血のかすかに混じるみどりこあかり
抱かれてねむるみどりこいにしへの五十日いひの祝ひはこのころならむ
雪雲をスクリーンとして夕空にバステルカラーの虹かかりたり

津金 規 雄 神奈川

三島論の百家争鳴 凧たこぎわたる海の裏へと没り陽は隠る
とほき日の朝雲暮雨よほのぼのと書をほどく素心蠟梅
異性愛遂げ得ぬ男の身の裡を吹く風の色淡くまた濃く
早春の花まばらなる水の辺はひそけし耳を持たぬ君らよ
あからさまな性の履歴書 行間に死を希求する息づき熱し

小山 富紀子 京都

知恩院ちおんいんの御堂の辺より立ちし虹東山越え近江の方へ
初めての店の戸練ればええ匂ひにおひこのお豆腐とうふはきつとおいしい
新婚の父母の正月知つてゐる重箱の罅指でなぞりぬ
ひさびさにひと筆あるがうれしくてしばし見つめるこの年賀状
もう二度と桐の箆へら筒つつみに戻れないレンタル店に吊られし振袖

清水 正子 神奈川

思ひ出のへかんころ餅を焼いて食ぶ五島の旅はふたむかし前
島へゆく船の航路を滑空し飛魚とびうたち多分うみどり気分
ばらかもん飛魚とびうに魅せられてしまつたか学名も「アゴ」にせしシールボルト
千年も前からあつたキャッチコピー「亡き人に会へる三井楽みみらく」は此処
三井楽はステンドグラス美しき教会ありて神に会へさう

福士 りか 青森

バスは来ずタクシーも来ずさればよと歩み出したり雪の歩道を
十メートルほどで区切れる雪の歩道あちらとこちらとあうんの呼吸
吹き付ける雪がメガネに貼りつくを指ワイパーで拭ひつつゆく
降る雪がさあつと捌はけて青空が広がることもあるよ だからね
青空のもと雪道をあゆみゆけばひかりの粒子が胸を満たせり

藤野 早苗 福岡

おほははの仕立てし褻なる節^{ふじつじま}紬紅絹の八掛裏勝りなり
飛来してまた帰りゆく鳥たちの旅を支ふるコンパス細胞
漉し餡で牛皮でつつむ不揃ひの母が母大福となる
最終の一画横に貫きて「毒」の中なる母を書き了ふ
日の暮れを待ちて去りたる影法師ぞしてわたしはしんそこひとり

田宮朋子歌集 令和7年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

光に濡れる コスモス叢書第1260篇 角川書店

著者住所 〒940-2056 新潟県長岡市王番田町二八〇―一

桑原正紀著書二冊

よっこ、歌の世界へ 歌書
コスモス叢書第1261篇 本阿弥書店

令和7年9月刊 一七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

麦熟るるころ 第十歌集
コスモス叢書第1270篇 本阿弥書店

令和7年11月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九―八―一〇六

風間 博夫 千葉

鳩尾のあたりに沁みるしくしくの痛みレントゲン撮れど映らず
紹介状もらひCT検査受くひとり総合病院にゆき
自動的に動くベッドに横たはりトンネル状の装置に入りぬ
X線使ふCT検査でもわからず結局内視鏡のむ
内視鏡のんで直接胃壁視る出血してゐる箇所見当たらず

奥村晃作歌集 令和7年9月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

天啓 コスモス叢書第1262篇 短歌研究社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

島田 暉歌集 令和7年10月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

昭和の鴉 コスモス叢書第1259篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 神奈川県横浜市瀬谷区本郷一―二四―六

小島なお歌集 令和7年12月刊 二〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

卵^{ちん}降る コスモス叢書第1263篇 左右社

連絡先 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷三―五五―一二二
ヴァイパルテノンB1 左右社

田中愛子 埼玉

帰路につくバスの窓より拝みたり姿ちひさき鳥芻沙摩明王
はるかぜの吹くころふつと戻り来よコスモスの原わたりゆく友
「決済」はさんずいにして水のごとお金さらさら流れてゆくよ
ガーリックトーストの香に目覚めたり連休まなかの日曜の朝
右ひだり対称となる名をもちて高市早苗かたへに傾ぐ

橘 芳 園 新潟

かくれ場があらちちらにあるやうな新京都駅春のにぎはひ
十八で来たりし頃は京の町肩をゆらして電車走りぬき
路地路地を歩く旅人われの如電車走りぬき京都の町は
京の路地道迷ひして俊成が衣通姫祀りし社に出でぬ
下校する京わらべらは金髪の舞妓衣装のあとに付きゆく

水上 比呂美 東京

をさなこの青いスニーカーは三足目わがスニーカーは何足目だらう
全身で飛びつく坊や全身で受け止めきれず落ち葉を散らす
ぼけつにおもちや隠せばをさなは好戦的な顔つきをせり
隠れたり追ひかけられたりするうちに制御不能の坊やとなりぬ
お砂場へ二足歩行で来る鴉坊やの靴を履いてみるかい

原賀 環子 東京

一品ひとしなに四つの鍋を用意して旨煮ことしもおいしく作る
数の子をティッシュで包み絞くりつつデジャ・ビュこの頃見ないさびしさ
彼の岸はわれの側かも大みそか此岸に夫は漢詩読みある
人日が在るはうれしく七草のバックをひらき米を研ぎけり
適性を、より見分くるや今年から司法試験のパソコン解答

大野 英子 福岡

折るやうに首ふかく折り縦列にユニボが並ぶ晦日ゆふぐれ
ペランダの鉢の受け皿を水場とし雀らつどふ陽の差す昼を
雀らのくわんぎのこゑのまちかなるひととき世間の憂さを忘れる
無力なる老いとなるのか世の惨状眺めるばかりのすみつごらしの
もう二度と生まれ変はりはまつびらだ獣、虫、草まして人には

松尾 祥子 東京

午年に生まれた義兄は馬を飼って旨いお節をうまうまと食む
屠蘇を酌み述べ合ふ抱負ははその母は長生き私は飛躍
六人の曾孫の名前しるす母「はるとんく」とは「はるとくん」なり
お年玉もらふやべこりお辞儀してすかさず中を覗く七歳
駅伝を見つつ昼寝す補聴器も眼鏡も要らぬ九十七歳

鈴木 千登世 山口

かけ違へ多きひと日の果てに織るへつづれ(平織り)とつとんがらり
織りすすむ布にこころの波ありて騒ぐ心の乱調つづれ
経糸は(宙)緯糸は(宇)とふ喩に遠くあれども二つなき布
小半時機(はた)に向かへば風ぎてゆく単純にまた救はれてをり
風ぐままに織れば澄みゆきそれ過ぎてものぐるほしくなる心とは

小島 な お* 東京

硝子戸に押しあてる五指 隔てつつ指の谷間へ落ちてゆく雪
雪あかり 平たく眠りいる父に球体関節の手を近づける
内耳から揺れる季節を受けとめる風は椿に椿の影を
目を伏せる淡いちからが陽のあたる春の壁画を剥落させる
限りなく桜は文字に近いから流れてゆけり眼球のなか

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

気のやさしい猫ほど虐待されやすい赤ペンキの猫、青ペンキの猫
虐待と思ひもせずには唄ひしかへ山寺の和尚さんへ今はずうたへず
青空の一角うすぐろく曇り山火事消えずへりが飛び交ふ
風向きが西にかはればあなあはれへ宇津の山辺に山火事迫る
おとなりもそのおとなりも消防士すこし緊張して「おはよう」

あの世への船出のためにA Iの返答つらつら読めば血まみれ
怒りの赤、痛恨の赤、恋の赤、空に真つ赤な傷口の赤
手のひらの満月そして半月よ 小さな葉のお世話になりぬ
今だけは心を凍結して眠る 眠れば明日も生きてゆけるはず
重箱にかまほこの白だけつめて父と母とを偲ぶ年越し

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

さくら湯の味 ―女性と人間―

〈女は大地〉かかる矜持のつまらなさ
曇さやさやとさくら湯は澄み

米川千嘉子 『夏空の權』^か

牡丹桜の花びらを塩漬にしたものを桜漬
といい、それに湯をそそぐと、ほぐれて花
弁のようになる。香りがあり、見た目も美
しい。

婚約とか婚礼とか、そういう目出たい儀
式に関わりの深いのが桜湯である。もし和
服の女性がこの桜湯を飲んでいたら、なん
とも言えない艶やかな雰囲気は漂うだろう、

と勝手に想像する。

ある日、作者は桜湯を飲みつつ、女性の
生き方について考えている。〈女は大地〉
などという言葉がある。女は生命のみなも
とであり、大地のようなものだ、という意
味であろうが、そんなことは女性を型には
め込もうとする男たちへたとえば、桜湯に
は和服の女性が似合う、などと妄想する連
中)の言い草にすぎない。

女は大地である前に、一個の人間であり、
それぞれ固有の人格を持っている。世間に
は、〈女は大地〉という矜持を持つ女性も
いるが、それではつまらない。

自分は、男中心の社会にまどわされず、
自分の生き方をしたいと思う。

そんなことを言っている作品ではなから
うか。結婚前の作であり、自分の中の〈女
性と人間〉についての思索から生まれた歌
であろう。作者の目の前に澄んでいる、湯
の中の花びらが美しい。

(『うたを味わう』より再録)